

# 作家の肖像

## 第7回

このコーナーでは、  
毎回一人の作家を取り上げ、  
美術評論家の酒井忠康先生に、  
お話をうかがいます。



## 1922- 柚木沙弥郎

ゆのき・さみろう  
1922年東京都生まれ。染色家。  
42年に東京帝国大学文学部美術学  
美術史学科入学。終戦後、46年  
に大原美術館に就職。その後、  
染色工芸家の芹沢銈介に師事、  
染色家を志す。以来、多くの作  
品を発表し、数多くの個展を開  
催。絵本、版画、ポスターデザ  
イン、彫刻など、染色以外の活  
動も精力的に行っている。近著  
に『柚木沙弥郎 92年分の色と  
かたち』(グラフィック社)がある。

### ひょうひょう 飄々とした人

2013年夏、当館で、染色家・柚木沙弥郎さんの展覧会「いのちの旗じるし」を開催しました。そのとき、柚木さんはすでに卒寿を迎えられていましたが、声には張りがあり、お話しされることも実に明快。飾ったところがなくて飄々とした人——そんな印象を受けました。

柚木さんは、この展覧会に向けて新作に取り組んでくださったのですが、それが新版教科書『美術1』の32ページに掲載されている「まゆ玉のうた」(右写真)です。簡潔なデザインの中にモダンな空気が漂う、どこことなくご自身のお人柄を感じさせる作品です。

### かたそ 型染めとの出会い

柚木さんの制作の基本は、「型染め」です。型染めとは、耐水加工した和紙で型紙をつくり、布にあてた上から防染のための糊を置き、その他の部分を染める技法。この方法でタペストリーや服地、屏風仕立ての作品などを制作されています。

彼が型染めに会ったのは、24歳のとき。大原美術館(岡山県倉敷市)に勤務していた頃でした。ここで、型染めの第一人者である芹沢銈介(せりざわけいすけ)が制作したカレンダーを見て、柚木さんは強く心を動かされます。

そして美術館を辞め、民藝運動を提唱した柳宗悦(やなぎむねよし)から芹沢を紹介してもらい、本格的に型染めの道に進んでいくことになります。

芹沢は「始めから作家になろうとするのではなく、まず職人から学ぶべきだ」という考えの人でした。柚木さんは、師の勧めで静岡県の染物

屋に住み込んで修行をし、布の扱い方や染めの基本を一から学びます。それが、今の彼の原点になっていることは間違いありません。

### 詩情を感じさせる作品

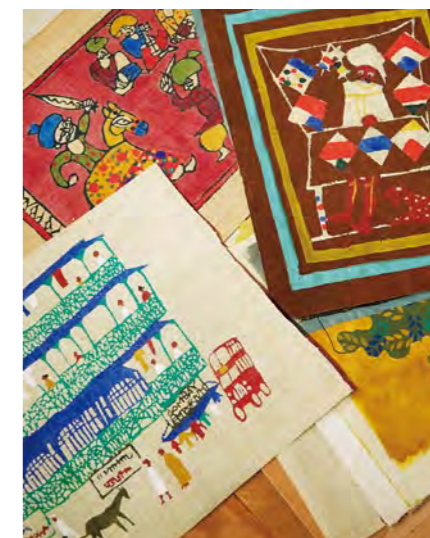
師である芹沢の型染めは、非の打ちどころがなく完璧です。もし芹沢の作品が部屋に掛けてあったら、その前に立ってじっと見入ってしまうでしょう。いっぽう、柚木さんの型染めは、いい意味で隙がある。もし部屋に掛けてあったら、作品はもとより空間全体が心地よく感じられる、そんなよさがあります。「詩情」があると云ったらよいでしょうか。

2014年秋、パリにあるフランス国立ギメ東洋美術館で、「La Danse des formes 柚木沙弥郎のテキスタイル作品展」が開かれました。こちらの展示も、とてもすばらしかった。私はそのレセプションに参加したのですが、柚木さんはマイク片手に非常にハキハキとお話をされて、見事に聴衆を惹き込んでいました。

今、現代美術の現場で、こんなに生き生きと制作に励む90歳のアーティストを、柚木さん以外に私は知りません。これからも変わらず作品を生み出して行ってほしい——パリの美術館で少し興奮しながら話す柚木さんの横顔を見つめながら、改めて思いました。(談)

※芹沢銈介(1895-1984)  
染色工芸家。柳宗悦らの民藝運動に参加。  
重要無形文化財保持者(人間国宝)。

酒井 忠康  
さかいただやす  
世田谷美術館館長、美術評論家。  
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。  
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。  
光村図書中学校『美術』代表著者。



上 / 「まゆ玉のうた」(1~8)  
綿 型染め 各258×87cm 2013年 作家蔵  
世田谷美術館で開催された「いのちの旗じるし展」で、  
作品の前に立つ柚木氏。展覧会にあわせて、新作を発表した。

左 / 「指人形」シリーズ  
紙粘土 布 2007年 作家蔵  
型染めだけでなく、立体造形も制作。写真は紙粘土でつくられた指人形。  
人形が着ている服は自身の染め布や古着を使う。

右 / 型染め絵  
綿・紙など 型染め 1980年代頃 作家蔵  
旅先で出会ったモチーフを作品することも多い。  
写真は木綿の生地に型染めをし、和紙で裏打ちしたもの。(撮影:木寺紀雄)